

学会通信

第9号

会員の皆さまへ

理事長 米山文明

錦秋の季節を迎え、会員の皆さまもご多忙にご活躍のこととお慶び申し上げます。

私たちの住む地球上においては、本年も春以来、地震、豪雨、台風と日本のみならず世界的規模で自然災害が発生し、人類の行為が自然から天罰を受けている感すらしています。人間社会の生活においても、これまでは考えられないような倫理的崩壊現象が増幅されつつあります。それらを防ぎ、立て直すためにも私たちは文化や芸術分野において、伝統と未来を見据えた上で如何なる教育体系を持つべきかを問われているのではないのでしょうか。

皆さまのご協力のお陰で本学会も5月の例会と8月の研修会を無事に終え、本年度後半の活動に入りつつあります。

5月の81回例会では、山田実氏の「イタリア歌曲の装飾音の扱い方」について、永井和子氏、橋田恵美子氏の「声楽教育多年の経験者としての報告」などの研究発表がありました。特別講演はオペラ演出の権威、ウバルド・ガルデイーニ氏から、オペラにおける役柄の性格表現をメインにしたご指導があり、ユニークでした。現役声楽家のコーナーでは五郎部俊朗さんが日本に数少ないロッシーニ歌いとして、素晴らしい高音歌唱の妙技を披露してくださいました。そして技術的に貴重な体験談を簡明に分かりやすい表現で解説されたのが印象的でした。

8月の研修会は前年と同じ日本福音ルーテル東京教会で、22日、23日に行われました。22日は本学会の教育部会が推進中のテーマが中心でした。午前ハンガリーのコダーイシステムの実態を紹介していただくために、日本コダーイ協会の顧問羽仁協子氏にお願いいたしました。体調不良のため副会長の知念直美氏と知念まり氏、河野誉允（よしみ）氏の三名の講師をご推薦くださいました。三講師ともそれぞれ別の角度から、たいへん意味深い実践、体験談をしていただきました（詳細は学会誌34号で報告します）。22日午後は川上理事が女子中・高校生をモデルにして合唱指導の実践を示されました。

23日午前は、米山が音声生理学の中で、特に「呼吸」のみに的を絞って、少し詳細な部分に立ち入った話をしました。次回に「喉頭調節」「共鳴」に分割して話す予定です。23日午後は日本歌曲の公開レッスンとして、斯界の権威、伊藤京子先生が快諾してくださいました。そしてその結果は素晴らしいレッスンでした（これも具体的な詳細は学会誌34号に述べます）。

私がこれを聴講して痛感したことの一つを述べます。それは本学会が「日本声楽発声学会」と命名されているが「日本」の歌曲、歌唱法、発声法をあまりに粗略に扱ってこなかったかという疑問です。外国のイタリア、ドイツ、フランスなどの歌曲についての研究者、発表者は数多くありながら、日本歌曲を専門に追求する研究者（歌唱、理論、教育とも）があまりにも少なかったのではないかという点です（特に基礎的な部分において）。これはたとえば日本人が外国でのセミナーや演奏会で、それぞれの外国語のものに如何にすぐれていたとしても、所詮はその本国人と対等に勝負して、相手の域を超えることは至難であろうということと重なります。日本人が自国語の独創性を示すすぐれた表現方法を持たないかぎり、かなりのハンディを負うことになるのではないかという危惧です。教育部会の活動推進が求められる所以でもあります。

最近のトピックスとして、今回パリ在住の佐野友紀会員からの便りに（本号後出）、「フランスがオペラの一演目にかかる費用と、日本の文化庁が1年余りにかける予算とがほぼ同額」とあります。この一例だけ見ても、文化国家を自任して、バイエルン国立オペラ来日公演初日（タンホイザー）、終演後オペラ団幹部と談笑している某国首相の新聞写真記事（「朝日」10・1）はまさにピエロと私には見えました。

終わりに事務報告です。①新しくホームページが池田理事の大努力でようやく実現（詳細は後記）、②新顧問に堀内久美雄氏（音楽之友社社長交代に伴い）、新理事に伊原直子氏（東京芸大教授）を委嘱。

執行部一同さらに努力を重ねて学会発展に務める覚悟です。会員の皆さまの変わらぬご鞭撻とご協力をお願いいたします。

【Q&A】

ビブラート(vibrato)とトレモロ(tremolo)

本学会の討論の中で、ときどき用語の定義が混同、誤解されて議論がかみ合わないことがあるので、参考までに医学分野の学会で決められている定義を示す。本学会でも共通概念で討論するために。

ビブラート〔震音(しんおん)〕:「人間の音声は、定常的な持続発声を行っても、その高さや強さに多少の変動がある。この変動が規則的である範囲のものであると、聴覚印象的に音の響きは豊かで音楽的にも望ましいものとなる。このような音声の変動現象をビブラートという。その範囲は、たとえば高さの変動分についていうと、声の高さによって異なり、低い音では1秒間に3～5周期程度、高い声では6～10周期程度の変動が好ましいという」。

トレモロ〔顫音(せんおん)〕:「定常的な発声をしようとした場合、その声の高さと強さに、不規則なしかも大きい変動（その範囲がビブラー

トの場合より大きく、一般に不規則である）を伴う現象をトレモロという」（以上、日本耳鼻咽喉科学会篇、用語集）。

別に「日本耳鼻咽喉科全書」（第4巻、第3冊、音声）によれば、ビブラートは「高さの変化が主で、その変動は規則正しく、割合は毎秒5.5～7.0回が普通で、高さの変化幅は1半音～1全音。個人差はあるが、1秒6.5回、1半音が標準」さらに「トレモロは本来の意義はビブラートと同じであるが、一般に“声のトレモロ”という場合はビブラート、トリル以外の声の高さの動揺を総括して言い、歌声だけでなく話し声にも現れる。トレモロとビブラートの違いは多くの場合、前者は不快感、不安定感があり、後者は美的効果があり、快感を与えることが条件。不快感の原因は声の高さ、強さ、音色の変化が不規則、変化の回数が少なすぎる（高音の動揺感）、逆に多すぎる（不快な音色）、高音の動揺が著明すぎ、聴き手に焦燥感、不安定感を与える」。

〔補足1〕トリル(Trill):ビブラート、トレモロとは異なり、作曲者の指定で行う装飾音の一種で、主音と副音が必ずある（半音差か1全音差）。ただし、声の場合は1全音のトリル→2.5半音、半音→2.0半音のトリルになることもある。毎秒の変化回数は6～8回。

〔補足2〕ビブラートの生理学的研究によると声の生理的動揺は完全に一定ではなく、発声の起始時(Einsatz)と終始時(Aussatz)に著明で（松崎、岩村）、目安としては次のようになる。

- ①高さ:定常部分の平均振動数の2～5%（颯田）、立ち上がり部分を含めて10%以下（松崎）。
- ②強さ:立ち上がり部分を含めて10デシベル以下（岩村）。
- ③速さ:毎秒16分割以内。

〔補足3〕F.ディースカウのことば。「ビブラートにおいては、日本人の声は一般的にヨーロッパ人の声よりゆっくりしている。これには注意しなければいけない」（1997、NHK趣味百科「シューベルトを歌う」より）。

(F. Y)

〔海外だより〕

パリのオペラ公演から

佐野友紀

パリには二つの国立オペラ劇場のほか、さまざまな音楽ホールがあるが、オペラやコンサートも国立オペラでは、28歳未満、65歳以上、失業中という条件があれば、150ユーロの席も当日空席があれば25ユーロで入手できる。オペラの一演目に日本の文化庁の一年余の予算を費やすフランスならではのであろう。

2005年前半に話題となったのは、「トリスタンとイゾルデ」。指揮はサロネン、歌手はマイヤー（イゾルデ）、ヘップナー（トリスタン）。脇役に北欧中心の充実した歌手たちをそろえ、冒頭、舞台正面スクリーンにアイルランドの暗く荒い波が映り、あたかも観客もイゾルデとともに船上にあるかのようだ。毒杯（実は媚薬）を乾した後スクリーンに映る男女は、しだいに着衣をとり全裸に、浄めの水により仇敵も身分も超えた魂の再生の儀式（ヒンドゥ教）、それは〈言葉も名前もなく〉と歌う二人の存在の意味を伝える。船が岸に近づき歓声とともに、客席が煌々と照らされ、その中央に威風堂々とマルケ王が登場する幕切れは圧巻。観客は総立ちでブラヴォーを叫んだ。

サロネンの指揮は前奏曲では濃密な闇を、第2幕のトリスタンとイゾルデの二重唱では音と声とを一つの波濤のように重ね合わせ、その高揚と深さを表出した。イゾルデのマイヤーは7、8年前にソプラノに転じたといわれていたが、3年前、シューベルトの歌曲によるパリでのリサイタルでは、高音は開きその響きが中音、低音部につながり、軽く柔かい歌曲の嬖を表現し、ソプラノと称したことを納得させた。今回のイゾルデは多大の期待をもって待たれていたが、ドイツ語による第一声が美しく響いた時、その期待は違わぬことが証された。

第2幕のトリスタンとの二重唱で、炎のごとく燃え上がっていく歌唱は、中低音部に深さと巾があるうえ自在で、その上に高音が開いていく。それを包み込むようなメロディ線を忠実に追うことによって大きなレガートを歌うヘップナーのヘルデンテノールとの対照は劇的で、音楽をよりいっそう豊かにした。終幕の「愛と死」では、最後の高音のピアニッシモが高く高く伸び、空と水とが溶け合う青の中に昇っていく映像とクリスタルの雪に覆われたトリスタンの死とが相まって観客に深い感銘を残した。ワグナーの楽劇の主旨を軸に映像、歌手、音楽、さらに観客も共に参加する舞台を作った演出家、映像作家の果敢な改革の精神に2005年批評家賞が贈られた。

シーズン最後の「エレクトラ」では（危険立入禁止）のテープの貼られた廢墟の宮殿へ向かって客席より登場する憎悪と孤独の象徴としてのエレクトラ、それを歌うポラスキは体型容姿ともにドラマティックソプラノに相応しく豊かな声とそれを支える身体のしなやかさ、演技力で期待に違わずこの当り役を歌い絶賛を博した。またオレストを歌ったブリュックの言葉の巧みな表現力は（ドイツ生まれクルト・モルの薫陶を受けた）、ポラスキに勝るものさえ見られたのは自国語を歌う強みでもあろうか。

プログラムの表紙には人形を膝に瓦礫の中にうずくまる若い女性、内にはアフガニスタン、イラクで報道される類似の写真、こうした今日性を強調した舞台は2004年よりザルツブルグの要職を蹴って就任した支配人モルティエ氏の意向を反映していよう。氏は音楽監督を廃し若手中堅指揮者7名を常任とし、演目ごとの解説の席では司会をし、子どもたちにオペラ講話をする等積極的に聴衆と接し、今日オペラが、劇場が意味するものを探っている。文化芸術は今日性を踏まえ改革前進していくのだから一とパリの人たちは理解しているようだ。

アメリカ インディアナ大学より

池田京子

平成17年度の文化庁芸術家海外特別派遣研修員として、9月末から約3ヶ月の予定で、インディアナ大学の客員研修員として、主に大学院の修士課程、博士課程の授業をリサーチしています。「声楽教育」の授業では、学生が学生を指導して、それについて教授が助言を与えるという指導法的なものもあれば、米山文明先生のVTRのように声の出る仕組みの分かるDVDを見せ、学生たちから様々な意見を聞き、質問に答えるディスカッション形式の授業もあります。Dr.コースでは論文のレビューが盛んに行われ、どの学生もしっかり意見が言え、先生は間違った考えや質問にも丁寧に答えているという印象です。いずれ市内の保育園や小学校の視察にも出る予定です。

また、歌のレッスンではオーストリアの宮廷歌手でもあるパトリシア・ワイズや、メトロポリタン歌劇場で20年も歌ってきたジョルジョ・トツィなど教授陣が非常に充実しています。9月末にはキャロル・ヴァネス（少し前までメトのトップスターの一人だった歌手）の公開マスタークラスが一週間にわたって行われました。11月には学内でゲスト・リサイタルをさせていただくことになり、忙しくなりましたが、まことに幸せな有意義な日々を過ごしております。12月まで精一杯見聞をひろげ、研究成果をあげたいと思っております。

〔長野支部だより〕

◇第59回例会◇

日時 10月30日(日) 午後1時～4時30分
会場 長野市城山公民館305室
内容 講義と実習

小松耕輔「母」

杉山長谷夫「出船」

講師：池田操（上越教育大学教授、本学会会員）

公開レッスン

講師：池田操（上越教育大学教授）

研究発表「唱法研究」①

カッチーニのアマリッリ

飯田忠文（本学会相談役）

【お問合せ】090-7185-3325 庶務 神田典子

〔会員だより〕

◆演奏会◆

- ◇ 女性合唱団コーロ・アンナ&
アンサンブル・ホフヌング
第1回 ジョイントコンサート

日時 10月30日(日) 14時開演

会場 横浜みなとみらいホール(小ホール)

曲目 Lux Aeterna Z.Randall Stroope
Psalm 24 Douglas Coombes
Missa brevis"PRO PACE"

Vytautas Miskinis

金子みすゞの詩による「水と影」全曲
小林秀雄曲

愛の名曲集

愛のあいさつ エルガー曲
わが母の教え給いし歌

ドボルザーク曲

アヴェ・マリア カッチーニ曲
他

「愛の風船」 中村千栄子詩・大中恩曲

指揮 川上勝功

ピアノ 浜田揺理 須江太郎

オルガン 浅尾直子

入場料 1,000円(全席自由席)

【お問合せ】045-789-3688(川上ひろみ)

第3回教育部会（通算27回）開催について

下記により第3回教育部会研究会を開催いたしますので、ご出席くださるようご案内いたします。

1、と き 平成17年11月26日（土） 10時30分～16時

2、ところ 東京文化会館 4F「中会議室2」

（JR上野駅「公園口」の前。会館「楽屋入口」よりお入りください）

3、プログラム

A 10:30～12:00 音声生理学講座

講 師 米山文明（米山耳鼻咽喉科院長、本学会理事長）

テーマ 医学的に見た幼少期における呼吸と発声指導の留意点

——12:00～13:00 昼食・休憩——

B 13:00～14:00 研究発表

発声・発語教育の内容と実践

——音楽教育（幼・小・中・高校）に携わる指導者が、発声・発語教育
についての認識を深めるために

C 14:00～15:20 グループ別ディスカッション——上記のテーマによる

（少人数のグループに分かれての意見交換）

D 15:30～16:00 まとめ——各グループで話し合われた事項の発表等

4、会 費 2,000円（郵便振替で11月22日までに納入のこと）

5、申込方法 FAX.またはハガキで、11月22日（火）までに本学会事務局に。

（定員38名。定員に達した場合のみ、出席の可否をご連絡いたします。）

〔連絡先〕 日本声楽発声学会事務局 TEL./FAX. 047-479-5701

〒275-0005 習志野市新栄2-9-2 西村暁子方

郵便振替 00170-0-119920 日本声楽発声学会

◇ 第2回 川上久美子ファミリー・
ジョイント・コンサート

日時 10月30日(日) 14時開演
会場 横浜みなとみらいホール(大ホール)
曲目 「古都幻想」より アルジェント横浜
「イタリア歌曲集」より
混声合唱団 コール・ペーレン
「日本民謡/北から南から」より
逗子混声合唱団
「万葉・防人の歌/手放れ惜しみ」
逗子女声合唱団
「水のいのち」 合同合唱
指揮 川上久美子 ピアノ 原澤真弓 他
〔お問合せ〕046-873-4123(北村)

◇ 魅惑のシューマン
～美しい歌、愛の歌～
—イェルク・デムスの喜寿を記念して—
ソプラノ 平松英子

日時 11月5日(土) 14時開演
会場 津田ホール
曲目 ノヴェレット op.21より (ピアノ独奏)
ミルテの花 op.25より
献呈 くるみの木 はすの花 他
ミニヨンの歌 op.98aより
ただあこがれを知る者だけが
君よ知るや南の国 他
子供の情景 op.15 (ピアノ独奏)
女の愛と生涯 op.42
入場料 A 5,000円 B 4,000円
〔お問合せ〕03-3726-4782 ミュゼリス(高橋)

◇ メソソプラノ 本多厚美リサイタル
～ダルトン・ボールドウィンとともに～

日時 11月28日(月) 7:00PM 開演
会場 横浜みなとみらいホール(小ホール)

曲目 グノー たそがれ ミニヨン ボレロ
グリーク 6つの歌 op.48
山田耕筰 この道 からたちの花
鐘が鳴ります かやの木山 他
バーンスタイン おいしいお料理
(4品の作り方)
ミュージカル「ピーターパン」より
“夢と一緒に”
「春の祭典」より 他
入場料 全席自由 4,500円(会員 4,000円)
本多厚美後援会 045-845-5372

◎日本声楽発声学会ホームページ開設

URL: <http://www.soc.nii.ac.jp/jars2/index.html>

このたび池田京子理事(本学会広報担当)、信州大学関係センターの先生方、池田研究室等の多大なご尽力によりホームページが開設できました。

「国立情報研究所」に登録し、学協会情報発信サービスホームページ構築サービスの利用申請が許可されています。当面は例会や夏季研修会、研究会等の「お知らせ」を広く一般の方に広報する目的で、年に3～4回の更新予定です。

今後、皆さまのご希望ご意見を反映して、より有意義な活用が可能となりますよう、よろしくお願いたします。ご意見ご要望等を事務局内「広報委員会」宛にお送りください。

〔事務局より〕

◎平成18年第83回5月例会の研究発表を募集いたします。締切は11月末日です。学会誌34号、学会通信への投稿もお待ちしております。こちらの締切は新年1月末日です。演奏会、出版、CD制作等近況についてもどうぞ事務局までお寄せください。 事務局長 川上勝功

学会通信 第9号	平成17年10月21日
日本声楽発声学会事務局	
〒275-0005 習志野市新栄2-9-2 西村暁子方	
TEL/FAX 047-479-5701	